

ラビ・ユダヤ教中央集権体制の終焉

—10世紀のイラクを中心に—

嶋田 英晴

1. はじめに

ラビ・ユダヤ教中央集権体制とは、バビロニアのイエシヴァ（学塾）の長であるガオンを中心とした指導層の律法上の影響力が、ディアスポラ（世界離散）のユダヤ教社会の隅々にまで及んでいた時代における指導体制を指す。この体制が有効に機能していた時代は、中東一帯をイスラームの勢力が席捲した西暦7世紀前半から、バビロニアのイエシヴァが衰退する10・11世紀半ばまでに相当し、ラビ・ユダヤ教による時代区分では、この時代はゲオニム期（geonim：ガオンの複数形）と呼び習わされている。

バビロニアのイエシヴァが衰退すると、それまでこの指導体制を権威と仰いで律法上の様々な問題を打診してきた各地のユダヤ教共同体は、タルムードの全遺産を継承し、指導者たるラビを中心に独立に自らの共同体内部を統制する体制を整えるようになったのである。これが、今日用いられる意味でのラビ・ユダヤ教（狭義のユダヤ教）の起こりである。したがってラビ・ユダヤ教中央集権体制は、エルサレムの第二神殿崩壊以来継承され、発展してきた諸伝統を世界各地の共同体に浸透させ、やがては今日まで続くラビ・ユダヤ教への道を準備した、という意味で重大な意義をもっている。

以上を踏まえ本稿では、バビロニアのラビ・ユダヤ教中央集権体制の性格が最も如実に表れると同時に、幾つかの要因によりその衰退が顕著となり始めた10世紀に着目し、その実態及び衰退の経緯を、当時のユダヤ教社会を取り巻いていた外的要因と内的要因から考察することによって明らかにしたい。

2. イスラーム圏におけるイラクのユダヤ教社会の地位

a. 概観

632年から711年の間のアラブの大征服に伴って出現した広大なイスラームの領土の中に当時のユダヤ教徒の90%が居住していた⁽¹⁾。ユダヤ教徒は、イスラームがもたらした単一の支配と制度、共通の交通通信ネットワークの下で、交易路上の拠点である各都市に必ずといってよいほど共同体を形成し、特に各地域の中心となる巨大都市ではとりわけ大きな共同体を形成するに至った。こうして10世紀の初頭までには、アラビア半島の一部を唯一の例外として、アラブの征服したほぼ全域の都市にユダヤ教徒の共同体がまんべんなく成立しており、これらの共同体間の交流が極めて頻繁に行われるようになっていた⁽²⁾。当初は農村部において農業を営むユダヤ教徒も

多かったが、アッバース朝の成立以来の「ブルジョワ革命」⁽³⁾を経て、イスラーム世界全体に商品貨幣経済が広く浸透した 9 世紀初め頃までには、ユダヤ教徒の大半は離農を完了して都市に集中していたのである。都市において共同体単位で街の一地区に居住したユダヤ教徒の職業は、あらゆる分野の手工業者、商人、商店主、医者、天文学者、翻訳家など様々であった。

こうしたユダヤ教徒の共同体の中でバビロニア（今日のイラク周辺、以下イラクと表記）のそれは最も古いものに属し、その起源は「バビロン捕囚」（紀元前 6 世紀）にまで遡ることができた⁽⁴⁾。イラクはイスラーム以前から続くユダヤ教徒の中心地であり、ここを拠点として多くのユダヤ教徒が各地へ植民活動を行い、東方ではイラン、中央アジアやインド、遠くは中国など、また西方では、地中海の沿岸地域やイベリア半島内へ進出していったコロニーを築いた。そして、こうした植民の傾向は、イスラーム時代に入るとますます盛んになったのである。イスラーム時代に入ると、これら広範囲にわたって存在した各地のユダヤ教共同体を指導したのはイラクのユダヤ教指導体制であった。

b. ガオンとレーシュ・ガルータ

イラクの古い都市スラ (Sura) とプンベディータ (Pumbedita) には、古くから有名なイエシヴァ (yeshiva : ユダヤ教教学の学塾) が存在しており、6 世紀頃までには後の「ラビ・ユダヤ教」(rabbinical Judaism) を規定する口伝律法タルムード (talmud) の編纂を終えていた⁽⁵⁾。イスラーム時代に入ると、学塾の指導者であるガオン (gaon) の指導の下に、学塾のハハミーム (hakamim : 唯一神であるユダヤの神が与えたとされる律法を学習し教授するという職務を果たす人々を指す包括的な名称。ラビもハハミームの一部を構成する。単数形はハハム hakam)⁽⁶⁾ が、各地のユダヤ教共同体から寄せられた律法に関する質問状に対して宗教規範に則した回答を与えるようになった。その結果、それまでイラクにおいてのみ通用していたラビ・ユダヤ教のタルムードの伝統が遠隔の共同体にまでしだいに浸透していくと同時に、イラクを中心とした各地の共同体間相互の交流や精神的絆が大いに促進されたのである。イスラーム時代のガオンは、カリフからその支配下の全ユダヤ教共同体を治める権限を与えられたレーシュ・ガルータ (後述) によって任命されたが、実際は学塾のヒエラルヒーを段階的に登った者の中からごく限られた名門の家系の者が順番に就任した。したがってイラクの一握りの宗教的指導者層が、当時のユダヤ教徒の社会全体を律法面において統制していたことになる。これにより、当時のユダヤ教共同体はどこに在っても比較的均質な精神生活を営むことができ、それがその他の社会生活や経済活動においても大きな影響を及ぼしていた。学塾の活動を支えた資金は、その権威に服した各地の共同体から徴収される税や、律法に関する質問状と共に各共同体からもたらされる寄付などによって賄われた。ガオンを頂点とするイラクの学塾によるこの指導体制は、11 世紀半ばまでの各地のユダヤ教社会に大きな影響力を及ぼしていたため、ラビ・ユダヤ教では、この時代を特にゲオニームと呼びならわしている⁽⁷⁾。

イラクの学塾がユダヤ教社会を律法面において統制していたとすれば、イスラーム圏の全ユダヤ教共同体を行政・司法の面において統制していたのがレーシュ・ガルータ (resh galutha : 捕囚民の長) である。レーシュ・ガルータはダビデ王家の血を引いており、少なくとも 2 世紀のパ

ルティアの時代からその存在を確認することができる⁽⁸⁾。レーシュ・ガルータはパルティアやササン朝の時代より、各地のユダヤ教徒から自治の象徴として敬われてきたが、イスラーム時代に入ると、カリフからイスラーム支配下の全ユダヤ教共同体を治める権限を与えられた。そしてバグダードを根拠地として広大なイスラーム世界に一元的な支配力を及ぼしたアッバース朝のカリフの下では、レーシュ・ガルータの権威はカリフ支配下のイスラームの領域にあるユダヤ教共同体の隅々にまで及んだのである。

10世紀の年代記作者であるナタン・ベン・イサーク・ハツ・バブリ (Nathan ben Isaac ha-Bavli) によって書かれたヘブライ語の年代記に、当時のバグダードにおけるレーシュ・ガルータの盛大な就任式の様子が記されている。以下、長くなるが、その年代記から就任後のレーシュ・ガルータの様子や、カリフとの面会の模様についての記述を見てみたい。

その時(就任式)から、彼は屋敷の外に出ることはない。平日、安息日、祭日に関わりなく人々がやって来て彼と共に祈るのである。もし、勤めのために外出しなければならない場合は、カリフの大臣のそれと同じような政府の籠に乗っていく。身なりは美しく着飾っている。彼の後ろには、15人もの付き添いが続く。彼の下僕達が彼の後に走ってついて行く。彼とすれ違うことになったイスラエル人は、彼の下に駆け寄って行き、彼の手を握り、そして彼に挨拶をする。目的地への行き来の間には、50から60人もの人がそのようにするのである。これが習慣である。カリフの大臣達がそうであるように、彼も自分の側近を従えずに外出することはない。

彼がカリフに面会を要求する時は、カリフの宮廷にいつも出入りしているカリフの宰相や下僕達に面会の希望を依頼する。すると、彼らがカリフへの面会を取り次ぐのである。こうしてカリフは許可を与え、そして宮殿の門の守衛に彼を入れることを命じる。レーシュ・ガルータが入廷すると、カリフの奴隷達が彼のもとへ駆け寄って行く。彼はポケットにお金(ディナールやディルハム)を入れておき、彼を案内してくれるこれらの奴隷達に施すのである。彼は胸のポケットに手を入れては、神が彼に定めた物を全ての人に与える。奴隷達は敬意をもって彼をもてなし、彼がカリフに面会して挨拶をするまで彼の手に触れ続ける。カリフは家来の一人に、レーシュ・ガルータの手を引いて指定した場所に座ってもらうよう合図する。そしてカリフとレーシュ・ガルータは会話に入る。カリフは健康や勤めのこと、さらに来訪の目的を尋ねる。これに対してレーシュ・ガルータは発言の許可を仰ぎ、カリフの祖先を褒め称えるいつもの賛辞や祝福を述べる。彼は要求が受理されるまで、カリフを丁寧な言葉でとりなす。やがてカリフは、その趣旨の法令を布告することを命じる。そしてレーシュ・ガルータはその場を辞し、満足気に帰途につくのである⁽⁹⁾。

レーシュ・ガルータは、カリフをはじめとするイスラームの支配者に対してはこのようにユダヤ教徒の利益の代弁者であり、同時に各地のユダヤ教共同体に対しては行政・司法権の頂点にあった。その表れとして、各地の共同体の裁判官や市場監督官を任命し、支配王朝の租税を徴収するだけでなく、自己のための税も徴収して孤児の養育などの救済や福祉に当てたのである⁽¹⁰⁾。

3. 外的要因（イスラーム世界の分裂）

ところで、レーシュ・ガルータの権限は、彼がカリフからカリフの支配が及ぶ版図内におけるユダヤ教徒の唯一の代表として任命されることによって初めてその権威を保証されたものなので、イスラーム世界に及ぼし得るアッバース朝カリフ権力の衰退と、それに伴うイスラーム世界内における独立政権の乱立⁽¹¹⁾の影響を免れることができず、早くも9世紀からその権限や影響力が及びうる範囲の縮小化が始まっていた。そして、イスラーム世界が三人のカリフによって統治され、さらにブワイフ朝によって帝都バグダードが占領されることによってアッバース朝カリフ自身が実権を失った10世紀半ばには、イラクのラビ・ユダヤ教中央集権体制が各地の共同体に対して及ぼし得た影響力は完全に弱体化していたと言える。

尤も、レーシュ・ガルータもガオンも、ラビ・ユダヤ教社会においては共に最も由緒ある家系に属していたことから、確かに10世紀半ば以降カリフの実権の喪失に伴って実質的な権限を行使し得なくなったことは事実である。しかし、各地のユダヤ教徒が、依然として彼らに対して敬意を抱き続けており、自らが属する独立のイスラーム王朝の支配者の意向に沿いつつも、相変わらずイラクの指導層との交友関係は維持し続けていたことも否定出来ない事実である。各地の独立のイスラーム王朝側からすれば、自らの版図内に居住しつつも、依然としてイラクのラビ・ユダヤ教指導層に対して忠誠を尽くすユダヤ教徒を、如何にして体制内に取り込むかについて腐心することとなった。

4. 内的要因（カライ派の台頭）

レーシュ・ガルータの権威のみならず、11世紀半ばまでにはイスラーム世界におけるイラクの学塾の指導体制の影響力も衰えていたことは既に述べた。レーシュ・ガルータもガオンも最終的には共にカリフから任命されるのだが、その候補者をユダヤ教共同体内で決定するに際しては、レーシュ・ガルータもガオンも相互の承認を必要としたため、それぞれにとって御し易い者が選ばれることが一般的であり、両者は相互に補完し合う関係にあった。こうした両者の権威の動揺をもたらした要因として、イスラーム世界の分裂や動乱という外的要因があったことは既に述べたが、それとは別にユダヤ思想界におけるカライ派（Qara'i）の台頭という内的要因も考えられる。カライとは「文字を読む者」「文字の解釈に精通する者」という意味のアラム語である⁽¹²⁾。ラビ・ユダヤ教では、「モーセの律法」及び「タルムード」（Talmud）（モーセの律法とは、旧約聖書の最初の五編のことで、モーセ五書やトーラー（Torah）と呼ばれるユダヤ教の成文律法を指す。一方、タルムードとはユダヤ教の口伝律法の集大成で、本文ミシュナー Mishnah とその注釈グマラー Gemara' から成る）の両方を権威とするが、カライ派は「モーセの律法」のみを権威と認め、それ以後ラビ・ユダヤ教が発展させた口伝律法（タルムード）の伝統を一切認めない点でラビ・ユダヤ教と袂を分かť。カライ派の母体は、イラクやイランのユダヤ教徒の異端的傾向、アラブによる大征服に端を発する各地の宗教的、政治的、経済的混乱、及びイラクからイスラーム世界周辺の植民の遅れた地域へ移住していった貧しい階層の不満等、様々な要因を背景として8世紀初頭以降その勢力を急速に増大させていった⁽¹³⁾。

この勢力は、8世紀半ばの人物アナン（Anan b. David）及びその子孫をやがて独自の指導者と仰ぐようになったことから、当初アナン派と呼ばれており、レーシュ・ガルータとガオンの権威の及ばない集団として分裂していったが、史料からこの分派の呼称がカライ派と確認できるようになるのは9世紀以降のことである⁽¹⁴⁾。実際この分派は、アッバース朝カリフ・アルマームーン（Caliph al-Ma'mūn：在位813～33年）に対して、レーシュ・ガルータとは異なる独自の指導者としてナスィ（nasi）を認めるよう要望した。その結果カリフは825年に法令を発し、ユダヤ教、キリスト教、ゾロアスター教徒などに対して、最低10人以上の成人男性を最小単位とすることを条件に独立の共同体を組織すること、及び自由に独自の指導者を選ぶことを許可したのである⁽¹⁵⁾。これにより、ラビ・ユダヤ教とカライ派の分裂は決定的となり、内的要因によるレーシュ・ガルータの権威の弱体化もここに始まったのである。アナンは当時のレーシュ・ガルータの甥でダビデの血統に属し、博学であったことから次期レーシュ・ガルータの有力候補の一人であったが、口伝律法に対して否定的な見解を有していたために学塾の指導者達の意見と相容れず、彼らの承認を得られずにレーシュ・ガルータ就任を断念した人物である。

後にカライ派自身は、その起源を、ツアドクに率いられたサドカイ派に求め、全ての真理の発見はアナンによって成し遂げられた、とする。これに対してラビ・ユダヤ教側は、カライ派の起源を、次期レーシュ・ガルータ位を自らの弟のハナニヤに奪われてすっかり自尊心を傷付けられたアナンの傷心とその個人的野望に求めている。この見解はあまりにも一面的過ぎるが、イスラームの幾つかの教義を採用するなど、アナンの影響はやはり大きかったと言える。尤も、アナンはタルムードの伝統を否定することによってラビ・ユダヤ教の厳格な戒律から信者を解放した、という意味におけるユダヤ教の改革者ではなかった。というのも、彼はラビ達によって定められた食物規定からの逸脱を微塵も認めなかったばかりでなく、割礼の儀式により詳細な規則を導入し、断食の日を増やし、安息日に禁止される仕事の種類をより厳格に解釈したのである。彼は、親族間の婚姻に関する法、儀式上の浄不浄の問題や、異教徒との関係についてはとりわけ厳格であった⁽¹⁶⁾。ちなみに、ナスィと呼ばれたアナンの子孫達は、主にエジプトなどに住んでいたという。

ところで、カライ派内部は幾つもの集団に分裂していたようである。言い伝えに依れば、アナンは「トーラーをつぶさに調べ、私の意見に頼るな」と教えたとされているが、これはアナンの言動を絶対視せず、トーラーのみが唯一の法源であることを強調しようとした後代の人物によってアナンに仮託された原則であると言われる⁽¹⁷⁾。カライ派は、トーラーだけが神の言葉を写す聖なる文書であり、あらゆる真正なユダヤ的思想の唯一無二の源泉である以上、それを正しく解釈し、その解釈を展開していくことが唯一、学問の名に価することとなるとし、「書かれた」聖典を解釈するに当たっては、タルムードの教説を無視し、「理性」の働きのみによって正しき操作であるとする。この理性主義こそカライ派の人々の思考を決定的に特徴づける大原則であった。つまり、それまでトーラー解釈の至上の権威であったイラクのイエシヴァのガオンの代わりに、彼らは「理性」を据えた。徹底的な合理主義精神をもって彼らは聖書の意味を探った。この合理主義精神において、彼らは明らかにイスラームの合理的神学、ムタジラ派の思维方式の影響を受けていたといえる⁽¹⁸⁾。こうしたカライ派の活動が最も盛んになったのが9世紀末から10世紀にかけてであった。しかし、トーラーに依りながら、自らの理性を働かせて各個人が

個別に解釈をしたため、カライ派には見解の異なる様々な集団がひしめくことになったと言う。これら、思想的にはバラバラの集団に対して、その理由や出身地などにお構い無く、イェシヴァの権威とタルムードにたてつく者に十把一絡げにカライ派の烙印を押ししたのは正統派のラビ・ユダヤ教側のほうであった⁽¹⁹⁾。

10世紀に入ると、カライ派の体制もかなり確立され、自らの教勢を伸ばす一環として、聖書に関連する様々な学問研究が行われ、広範な学問領域において優れた学者を多数輩出するようになった。それらは高名な神学者、宗教的教師、文法家、辞書編集者、聖書注釈者などである。これらに加えて、アナンによってその学習が容認されていなかった世俗の学問の門戸も開かれた。その中でとりわけ文法上の注釈についての学問に対する情熱には目を見張るものがあり、ラビ・ユダヤ教の学者達にも多大な影響を与えずにはおかなかった⁽²⁰⁾。こうしたカライ派の台頭に対して、ラビ・ユダヤ教側の方も指をくわえて見ていただけではなかった。カライ派の活動が最も顕著になった10世紀においてラビ・ユダヤ教の立場から果敢に挑んだのが、エジプトのファイユーム出身の、サアディア・ベン・ヨセフ (Saadiah ben Yosef, 通称サアディア・ガオン, 882~942) である。サアディアは、本来イラクのガオンを輩出し続けてきた名門出身でないにも関わらず、その学識が評価されて10世紀の前半期にスーラのイェシヴァのガオンに就任した。彼は既に23歳の時に、カライ派とアナンを非難する論文をアラビア語で著したのを皮切りに、生涯に渡ってカライ派と争った。カライ派とサアディア・ガオンを代表とするラビ・ユダヤ教の対立は激しいものであったが、その対立の形態はあくまでも論争に留まり、身体上の攻撃即ち暴力の行使にまで至ることは無かった⁽²¹⁾。カライ派が、9世紀以降イスラーム世界を席卷したギリシア哲学以来の合理主義精神に基づいて聖書解釈をしていたことは既に述べたが、ラビ・ユダヤ教側、とりわけサアディア・ガオンもムータジラ派の思想から多くを学び、自らの率いるラビ・ユダヤ教の真正な信仰を守るに際しても、あるいはカライ派をはじめとする異端思想と論争するに際しても、最も信頼すべき重要な指導原理として合理主義的な理性を据えていたのである。一般に中世ユダヤ哲学といった場合、その起点をどの時代の誰に求めるか、が問題となることがある。大部分の研究者は、それをサアディア・ガオンに求めている。

ところで、果たしてカライ派はキリスト教におけるような意味での異端と断定できるのであろうか。確かにラビ・ユダヤ教にとっては、イェシヴァの権威とタルムードにたてつく者として許し難い存在ではあるが、そのラビ・ユダヤ教のみがトーラーの真の継承者であると断言することが出来ないこともまた事実である。実際、既に述べたとおりアッバース朝カリフは、カライ派をラビ・ユダヤ教とは異なるユダヤ系集団としてその存在を認めていた。こうした点については、現在カライ派人口が極めて少なく、自らについての研究が十分にされていないことなどから、ラビ・ユダヤ教とカライ派の相互認識やカライ派におけるイスラーム神学ムータジラ派の影響等について明確にされていない、などの問題点を指摘しておくに留め、今後の課題とすることとしたい。

5. ジャフバズの台頭

以上、イラクにおけるユダヤ教社会の指導層を中心とするラビ・ユダヤ教中央集権体制、及びユダヤ教社会の外的・内的両面にわたって従来の中央集権体制を弱体化させた幾つかの要因について確認してきた。最後に、ユダヤ教社会の外的・内的両面に関わりながら、9世紀末から10世紀にかけてラビ・ユダヤ教中央集権体制に動揺をもたらした重要な要因について触れることにしたい。

レーシュ・ガルータもガオンも共に名門の出身であり、就任に際して共同体内の有力者集団の承認を得、次にカリフによって任命され、最後に就任式において一般のユダヤ教徒に忠誠を誓わせる、という一連の手続きを踏まえることによってその権威の正当性が保証されていた。これら“公”の指導者とは別に、いわば“非公式”の指導者ともいえるべき存在でありながら、イスラームの支配者に対してもユダヤ教社会に対しても大きな影響力を振るったのが、主にイスラームの宮廷において活躍したユダヤ教徒の宮廷銀行家である⁽²²⁾。こうした宮廷銀行家は、9世紀末以降のアッバース朝の宮廷においてその存在や影響力が顕著になるが、その後イラクの影響から脱却していった各地のユダヤ教共同体や、アッバース朝のカリフ権力から独立していった各地のイスラーム王朝の宮廷において、むしろその重要性が増大していったと言える。なぜなら、11世紀以降各地のユダヤ教社会において正式な指導者（ナギッド、後述）を中心とする共同体組織が確立するまでは、これらユダヤ教徒の有力者が中心となって、当地のユダヤ教社会とイスラーム王朝の支配者の間を仲介する役割を担っていたと考えられるからである。ここでは、10世紀のアッバース朝宮廷において活躍したユダヤ教徒の有力な宮廷銀行家について、その機能のみならず共同体や宮廷との関係について言及する。

宮廷銀行家とは、アラビア語のジャフバズ (jahbadh) に対して Fischel⁽²³⁾ が付した解釈 (court banker) の訳語である。ジャフバズについては、イスラーム前期の資本家に関して扱った岡崎政孝の論文⁽²⁴⁾の中に詳述されている。岡崎は、ジャフバズを金融業者の一種、特に何らかの特権を付与された貨幣取扱資本家、高利貸付資本家であって、徴税人的性格や財務官的性格をも具備した多機能な存在と結論づけている⁽²⁵⁾。9～10世紀のイスラーム社会においては本位貨幣としてのディナールと、ディルハムの併存、地方的雑種貨幣の流通、秤量貨幣化という現象が見られ、これらこそが貨幣取扱資本家としての両替商存立の前提条件及び利潤搾出の必要条件となっていた。また、当時カリフ政権の徴税責任者たるアーミル (āmīr) は直接徴税にあらず、商人や貨幣取扱業者に各地の徴税権を委譲していたが、こうして地方から送られてくる地方的通貨による租税は、中央で本位貨幣のディナールやディルハムに換算しなければならず、そのためには再び各地の通貨に詳しい貨幣取扱業者の力を借りる必要があった。したがって、ここにこそ、徴税人的性格や財務官的性格を有する貨幣取扱資本家存立の前提条件が存した。さらに、当時のカリフ廷は軍事費、官吏の給料支出の増大により財政難に陥ることが多く、ここに税金を担保とする政権への貸付という、高利貸付資本家存立の前提条件が存していたのである⁽²⁶⁾。

このように、当時のイスラーム社会には、様々な面で金融業者を不可欠とする条件が揃っていた。これらの要求に応じたのがジャフバズに他ならない。ユダヤ教徒は、先に述べたイラクの学

塾を中心として形成された共同体間の強い絆を持ち、それを基本として各地の共同体に張り巡らされた広汎かつ強力な人的及び情報のネットワークを有していたことから、ジャフバズとして活動する上で、圧倒的に有利であった。また、イスラーム法が有利貸付を「リバー禁令」として固く禁じていたため、ムスリムは擬制的売買契約、利子参加組合、土地その他の質入れなどの煩わしく複雑な手続きを通じて利子付貸付を避けざるを得なかったのに対し、ユダヤ法は少なくとも異教徒に対する利子付貸付を容認していたため、ジャフバズとして金融業務に携わるユダヤ教徒の進出ぶりはとりわけ目覚ましかったのである⁽²⁷⁾。

こうしたなか、一握りではあるが、才覚に恵まれ信用を勝ち得たユダヤ教徒が貯蓄銀行を運営するようになり、多数の裕福なユダヤ商人やムスリム高官などから資金を預かって手元に巨額の資金を集中させた。やがて彼らは、自己の資本をも合わせた巨額の資金を、カリフやその他のイスラームの行政官達の求めに応じて用立てるようになり、次第に「宮廷銀行家」の意味合いを持つジャフバズとして確固たる地位を築いていったのである⁽²⁸⁾。イスラームの年代記には、ユダヤ教徒の宮廷銀行家がイスラームの支配者達に巨額の資金を融通したことを裏付ける記述がしばしば登場する。そのなかからいくつかの例を挙げてみたい。

宰相 (wazīr) のイブン・アル・フラート (Ibn al-Furāt) は、官吏の給料支払いのための財源を得るために、アフワーズ (Ahwāz) の宮廷銀行家であるユダヤ教徒のユースフ・ブン・ファンファース (Yūsuf b. Fanhās) を呼び、一ヶ月分の給料支払相当額の借款を申し込み、難渋するユースフを説き伏せ、借款を得ることに成功した⁽²⁹⁾。

宰相のアリー・ブン・イーサー ('Alīb. 'Isā) がユダヤ教徒の宮廷銀行家であるハールーン・ブン・イムラーン (Hārūn b. Imrān) とユースフを呼び、「汝らは、汝自身と子供に加えられる刑罰を避けたいとは思わないか。……私には毎月六日までに軍隊に支払わねばならない金が必要なのだ。それは毎月三万ディナールほどだが私には月始め一、二日のうちにそれを調達し得ない。だから毎月始めに、十五万ディルハム貸してほしい。勿論、アフワーズの収入からそれだけのものは返済しうるはずだから。」二人の宮廷銀行家は、なかなかこれを承諾しようとはしなかったが、宰相は二人が同意するまで説き続け、そして二人の承諾を得るや、早々に使を遣わし、その金をとりに行かせた⁽³⁰⁾。

以上のように、宮廷銀行家の財源は当時逼迫していた王朝財政にとって非常に魅力あるものであり、カリフ、スルタン、宰相などのイスラームの支配者達は表面的には宮廷銀行家に借款の強制を行っているが、実質的にはその資金、信用に頼り、これに政治的権力でもって強圧を加えることはできなかったという⁽³¹⁾。支配者達は彼らを失脚させようとは思わず、彼らに宮廷銀行家の地位を保たせた。そして宰相は必要な場合に宮廷銀行家を通じて商人達から金を借りた。もし宮廷銀行家が失脚し、商人達と取引のないものが宮廷銀行家になるようなことがあれば、カリフの政務は停顿してしまっただろう⁽³²⁾。ここからは、宮廷銀行家にとって、商人との強い絆を有していることがいかに重要であるかがうかがえる。なぜなら、宮廷銀行家は商人達の間で得ていた絶大な信用の力によって、主に裕福な商人から巨額の資金を集めていたからである。しかし、その資金をイスラームの支配者の必要に応じて貸し付けることで、今度はイスラームの支配者からも信頼されるようになり、その結果王侯貸付に必ずつきものの特権を享受し、益々その経済力

及び信頼を強めていったのである。こうした宮廷銀行家が、イスラームの支配者とユダヤ教社会の仲介者として、宮廷内とユダヤ教社会の双方において大きな発言力を持つようになったとしても何の不思議もないであろう。当然宮廷銀行家は、ガオンやレーシュ・ガルータといったユダヤ教社会の有力者とも深い結び付きを持つようになり、資金や宮廷対策などの面で彼らの援助を行う一方、彼らの進退問題にまで干渉することも少なくなかった⁽³³⁾。

宮廷銀行家は、勿論ほんの一握りのユダヤ教徒がなし得たごく例外的な成功例であった。しかし、それ以外でも、ユダヤ教徒の多くが金融業務に携わっていたため、金融業におけるユダヤ教徒の影響力はやはり大きかったようである。当時のバグダードでは、両替商などの金融業者が軒を連ねる特定の地域があり、その中心的な通りであるアウン通り (darb al-Aun) には、ユダヤ教徒の金融業者がひしめいていたという⁽³⁴⁾。バグダード以外では、アフワーズが9世紀までにユダヤ教徒をはじめとする商人達の商業活動の根拠地の一つとして大いに繁栄するようになっており、そこからの徴税額はアッバース朝領内において最高額を誇っていた。その繁栄ぶりを、ブライフ朝の書記であったミスカワイフ (Miskawayh) は、「アフワーズの歳入が止まれば帝国は立ち行かない⁽³⁵⁾」と表現したほどである。そして、アフワーズを中心とする地域のなかでも金融の中心地であるトウスタル (Tustar) の商人や金融業者の中には、非常に多くのユダヤ教徒がいたという⁽³⁶⁾。

以上見た通り、ユダヤ教徒の諸活動は各地のユダヤ教共同体の内部だけで自己完結していたわけではなく、イスラーム王朝の宮廷の諸政策や地域の経済の動向にまで深く関わっており、それらの発展に与えていた影響も決して小さいものではなかった。したがってこの様な点にこそ、異教徒であるユダヤ教徒が圧倒的多数派のムスリムと共存できた理由の一つが見出される。しかし、10世紀の半ばを過ぎると、戦乱や権力者による財産没収を恐れて、多くの商人（当時の有力な商人は同時に金融業務をも兼ねるのが一般的であった）が東方のホラーサーンや西方のシリア・エジプトへと移住していった⁽³⁷⁾。その中には当然多くのユダヤ教徒も含まれていた。これら大量の商人の減少の結果、アッバース朝の徴税機構が混乱したばかりでなく、貨幣制度や流通機構までもが大きな打撃を受けたのである⁽³⁸⁾。

以上確認してきた通り、イスラームの経済にとって今や必要不可欠となった金融業者、とりわけ宮廷内においても大きな影響力を持つに至った宮廷銀行家は、血統や学識を最重要視する従来のラビ・ユダヤ教の指導体制においては、本来ならば指導的役割を担う資格は全く与えられないはずである。しかし、アッバース朝のカリフを頂点としたイスラームの秩序が守られ、その中でラビ・ユダヤ教中央集権体制が有効に機能していた時代は、10世紀の半ばには既に終わりを迎えていた。イラクのラビ・ユダヤ教中央集権体制が、即座に終焉するという事はなかったが、次第に宮廷銀行家をはじめとする実力者達による影響力が強まり、彼らの意向を無視してはレーシュ・ガルータもガオンも立ち行かない状況に陥っていくのである。その後、約1世紀という比較的長い時間をかけて、イスラーム世界におけるイラクのユダヤ教社会の求心力が徐々に衰えていくと同時に、各地で現地のイスラームの支配者と直接関わりを持つようになった宮廷医、御用商人や宮廷銀行家など、実力を背景とした有力者達が、独自に自らの属するユダヤ教社会の存続と繁栄の方途を模索するようになっていくのである。いわば、地方分権体制のはじまりと言える⁽³⁹⁾。し

かし、これら新しい種類の有力者達が、イラクを中心と見なした上で自らの居住する地を地方と認識していたかは疑問である。様々な史料から、彼らの多くは強烈な自負心の持ち主で、学問や経済を盛んにすることで自らの居住地域をディアスポラの中心と考えてその発展に尽くすというメシア的使命感を抱いていたことがうかがえるからである。

6. 結び

本稿でも確認したように、イラクのラビ・ユダヤ教中央集権体制が本格的に機能する契機となったのは、イスラームによる広大な領域における一元的支配権の確立と、その支配者たるカリフによる正統性と権威の付与であったことが判る。この体制の下では、血統と学識が重んじられ、若干の例外を除いて、両者を兼ね備えた少数のエリート学者による支配が数世紀に渡って続いた。その間、カライ派等との対立などを経ながらもイエシヴァの学者達による聖典解釈と口伝律法タルムードの伝統がディアスポラのユダヤ教社会の隅々にまで浸透した。これこそが、この体制のもたらした最大の功績と考えられる。

10世紀の半ばを過ぎると、アッバース朝カリフの実権が有名無実化し、それと同時にディアスポラのユダヤ教社会に対するイラクのラビ・ユダヤ教指導層の影響力も弱まった。しかし、その頃には北アフリカやイベリア半島などに独自のイエシヴァが幾つも建てられるようになっており、もはや必ずしもイラクのイエシヴァに律法上の問題について打診する必要がなくなっていた。むしろ、新しい支配者とその制度の下で、経済的にもイラクよりはるかに繁栄し始めた地中海沿岸地域のユダヤ教社会に対して、イラクのユダヤ教社会は、経済的援助を求めようとするようになるのである。これに対して、経済的に繁栄するようになったエジプト、北アフリカやイベリア半島のユダヤ教社会では、当地のイスラーム系支配者と深い関係を結んだ実力者が、その指導力に対する正統性付与を求めて、イラクのイエシヴァに対して多額の資金的援助と引き換えに指導者の称号であるナギッド (nagid) を付与するように求めた。ナギッドは、自らが属するイスラーム王朝の版図内におけるラビ・ユダヤ教のみならず、カライ派及びユダヤ教の分派であるサマリア教徒をも代表する統括者としての役割を果たす存在であった。ナギッドと中央集権体制のこの相互依存関係は、血統を重んじたイラクの指導者層がかろうじてディアスポラのユダヤ教社会からの敬意を保っていた11世紀の半ば頃まで続いていた。しかし、このナギッド就任の条件には、もはや血統は一切重視されなくなっていたのである。

註

- (1) *Cambridge History of Judaism*, London, 1969, (以下 CHJ) p.393.
- (2) S.D.Goitein, *Jews and Arabs*, New York, 1955 (以下 Goitein, 1955) p.109.
- (3) *ibid.*, pp.101-110. 「ブルジョワ革命」は、ゴイテインの唱える仮説。アッバース朝の成立以来の諸要因が複合的に作用して、8世紀半ば以降の西アジアが、長い停滞の壁を破って経済的高揚を迎える経緯が説明されている。
- (4) S.Landshut, *Jewish Communities in the Muslim Countries of the Middle East*, Connecticut, 1976, p.42.
- (5) タルムード成立の詳しい経緯については、市川裕「タルムード期のユダヤ思想」、『岩波講座東洋思想ユダヤ思想1』所収、1988年を参照。
- (6) 同上, p.233.
- (7) 同上, p.236.
- (8) M.A.Stillman, *The Jews of Arab Lands*, Philadelphia, 1979, (以下 Stillman) pp.29-31; CHJ, pp.421-422; *Encyclopaedia Judaica*, Jerusalem, 1971, (以下 EJ) s.v. “Exilarch”, pp.1023-1034.
- (9) Stillman, pp.174-175.
- (10) *ibid.*, pp.29-31; CHJ, pp.421-422.
- (11) 9世紀半ばから、マムルーク軍閥の専横が激しくなり、カリフにも大きな影響力を与えるようになったのを皮切りに、各地で反乱や独立の王朝が乱立するようになった。
- (12) 市川裕, 前掲論文 p.230; EJ, s.v. “Karaites”, pp.761-762.
- (13) カライ派の起源については, EJ, s.v. “Karaites”, pp.763-769.
- (14) *ibid.*, pp.763-764.
- (15) EJ, s.v. “Exilarch”, p.1028.
- (16) EJ, s.v. “Karaites”, p.765.
- (17) *ibid.*, p.765.
- (18) 井筒俊彦, 「中世ユダヤ哲学史」『岩波講座東洋思想ユダヤ思想2』所収, 1988年, p.11.なお, イスラーム世界で9世紀に最盛期を迎え, その中で生まれたユダヤ思想にも多大な影響を及ぼした合理主義の思潮, とりわけムータジラ派については中村廣治郎, 『イスラーム』東京大学出版会, 1977年, pp.153-163.; 井筒俊彦, 『イスラーム思想史』中央公論社, 1991年, pp.54-65.等を参照。
- (19) ハイム・ヒレル・ベンサスン『ユダヤ民族史3 中世篇I』六興出版, 1977年, p.115.
- (20) EJ, s.v. “Karaites”, p.768.
- (21) *ibid.*
- (22) CHJ, p.429.
- (23) W.J.Fischel, *Jews in the Economic and Political Life of Mediaeval Islam*, London, 1937, (以下 Fischel) pp.3-4.
- (24) ジャフバズについては, 岡崎正孝「イスラーム帝国における前期的資本家の一側面—特にジャフバズについて—」『東洋史研究』20:1, 1961年, pp.23-45を参照。
- (25) 岡崎, 前掲論文, p.23.
- (26) 岡崎, 前掲論文, pp.24-28.
- (27) アッバース朝のジャフバズは, そのほとんどがキリスト教徒及びユダヤ教徒であったという。EJ, s.v. “Djhabadh”, p.383.
- (28) CHJ, p.396.
- (29) 岡崎, 前掲論文, p.34.
- (30) 岡崎, 前掲論文, p.35.

- (31) 岡崎, 前掲論文, p.37.
- (32) 岡崎, 前掲論文, p.37.
- (33) EJ, s.v. "Exilarch", p.1029.
- (34) Fischel, p.10.
- (35) Fischel, p.31.
- (36) Fischel, p.32.
- (37) 佐藤次高『中世イスラム国家とアラブ社会』山川出版社, 1986年, p.26. なお, 商人の移住についての記述は, 同時代のアラビア語史料の随所に見受けられるが, それらは商人一般について述べているため, ユダヤ教徒を含むズィンミーとムスリムとの区別はされていない。ちなみに佐藤, 前掲書, pp.43-44.に依れば, アッバース朝の混乱は既に 920年代から始まり, 更に 942年にはバグダードで戦乱が激化したという。そのうえ, 政府による財産没収が行われたため, 多くの商人が巡礼と一緒にシリアやエジプトへ移住した, と伝えられるという。
- (38) 佐藤, 前掲書, p.26. ; 家島彦一, 『イスラム世界の成立と国際商業』岩波書店, 1991年, pp.369-372.
- (39) ハイム・ヒレル・ベンサスン, 前掲書, pp.84-87.

The end of the centralized leadership of the rabbinical Judaism

Hideharu SHIMADA

This paper treats of the centralized leadership of the rabbinical Judaism. The term “centralized leadership of the rabbinical Judaism” means the leadership of the Babylonian (Iraqi) Jewish aristocracy over the whole Jewish communities under the Islamic rule from the early seventh to the middle of the eleventh century.

As the Yeshivah (center for rabbinical study) in Iraq began to decline from the middle of the tenth century, the rabbinical Jewish people in the local areas could not any longer ask for the various questions concerning the Talmudic law. Consequently, local Jewish communities inherited all the traditions of the rabbinical Judaism and arranged the independent systems controlling the inside of their own communities by placing their own rabbis as their leaders. This is the beginning of the “rabbinical Judaism” in the ordinary meaning of the words frequently used in our time.

On the basis of the matters mentioned above, this paper explains the actual conditions and the declining course of the centralized leadership of the rabbinical Judaism in the tenth century from the view point of both internal and external factors.